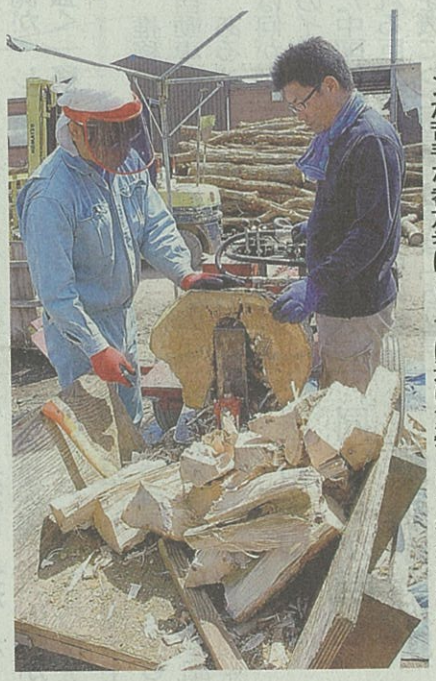
引きこもり経験者ら 仕事体験

「中間的就労」自立へ一歩

東近江で先進取り組み



黙々と木を割る作業を続ける「薪プロジェクト」の参加者。機械の駆動音が大きくて会話しにくいが、コミュニケーションが苦手な参加者にとっては逆に気楽という（東近江市）

まきの加工販売店「薪遊庭（まきゆうてい）」（東近江市）で4月上旬、引きこもりの経験や発達障害がある20～40代の男性5人が、長さ40センチほどに切った丸太をまき割り機に入れていた。10年間、引きこもりだったという30代の男性＝同市＝は「ここをステップに就職につなげられれば」と笑顔を見せた。

男性たちは週2日、1日5時間働き、割ったまきの量に応じて1日2千～5千円の収入を得る。約3年半で28人が「卒業」し、全員が企業などに就職した。

「薪プロジェクト」と名付けられたこの取り組みは、同店や東近江市、障害者の就労支援団体「働き・暮らし応援センター」（近江八幡市）が共同で2010年に始めた。東近江市の総面積の56％を占める森林の荒廃を止め、イノシシやシカによる作物被害を減らすのが目的。そのために、地域のエネルギー資源であるまきを持続的に利用する仕組みを模索してきた。その中で、引きこもり経験者や明確な障害はないが生きづらさを抱えた人たちが、林業者によって山から切り出された木のまき割りを担う今の方法に行き着いた。

薪プロジェクトは、循環型社会を実現する取り組みとしてだけでなく、「中間的就労」の場としても注目されている。中間的就労は引きこもりやニートのほか、長期間失職している人や未就職の高校中退者らすぐに企業などで働けない人たちの就労体験や社会参加の場とされる。国は、2015年4月施行の生活困窮者自立支援法の支援策に中間的就労を盛り込み、全国で広める方針だ。（田代真也）

＝28面に続く

湖流